# 少人数クラスにおける SNS 活用に関する研究

## ―LINE の実験的活用から―

田 島 博 之

### 1. はじめに

今日の高度情報化社会は、見えない所において個人にまで大きな影響をもたらすユビキタス社会を迎えている。個人情報の漏洩やネット詐欺の拡大、出会い系サイトに学生が巻き込まれる等、様々な事件が頻繁に起こりニュースにもなっている。また、インターネットの発展とともに仮想社会が出現しオンラインゲームによるネット依存は、青年たちの引き籠りと密接な関係を持ち不登校をもたらす要因になっている。さらにクラスの裏サイトと呼ばれる仮想クラスが生まれ、いじめの温床となったことは大きな社会問題として取り上げられている。このような社会にあって青少年によるインターネットの活用能力はますます重要になり、教育現場においても早急に取り組むべき課題となっている。

情報リテラシィ教育は重要と訴えるが、ともすると「危険な道具は使わせない」となる教育現場は多い。確かにインターネットを利用したツールは使い方を間違えると、様々な事件に発展してしまう危険性がある。しかし、この問題は今に始まったことではなく、携帯電話や E メールが生まれた時にも同様な議論がなされている。いつの時代にあっても大切なことは、新たなツールの背景に潜む本質を見極めることである。

文部科学省は平成 25 年 10 月から翌 26 年 1 月にかけて全国で初となる情報活用能力調査を行った [1]。文部科学省は、これらの調査からわかった知見

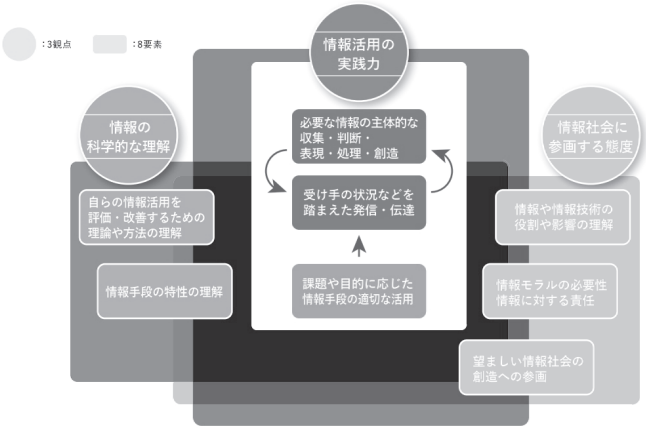



**図１　情報活用能力の３観点８要素**

「21 世紀を生き抜く児童生徒の情報活用能力育成のために」[2-1] より抜粋

を新たな指導要領に盛り込む方針を打ち出すとともに、平成 27 年 3 月には「21 世紀を生き抜く児童生徒の情報活用能力育成のために」とのパンフレットを発表した[2]。この中で情報活用能力とは「3 つの観点と、それを織りなす 8 つの要素」から構成されており、これらを総合的に伸ばすことが重要としている。

本研究者はクラス担任として 20 人程度の小さなグループの指導を行っている[※1]。大学において小中高生のような綿密なクラス運営を行っていくことは非常に難しい。大学では教員、学生共に制約が多く講義以外で学生と接触する時間が絶対的に少ない。

LINE の活用に関する研究を CiNii で検索したところ、現状では LINE によるいじめ「LINE はずし」を取り扱った論文は多かったものの、LINE をクラス教育にどのように活用するかの研究は今のところ見当たらなかった。

そこで、本研究では学生の利用率が最も高い SNS である “LINE” を活用し、クラス運営を円滑に進め、担任や学生への負担を減らすことを試みた。この研究を実施することによって、少人数クラスにおける LINE の有効な活用事

例を示すことができた。また、同時に教員と学生の共同学習の中でLINE活用上の問題点を抽出することができた。

今回の試みは学生たちの情報活用能力向上に寄与してきたと考えている。これは、図1に示される情報活用能力の一端を向上させる知見になるであろう。そこで以降、第2章では現代の青少年がインターネットをどのように利用しているかを示し、第3章で秀明大学のSNS利用状況調査を示す。第4章ではLINEを利用するメリットを示し、第5章でクラスにおいて有効であったLINEの活用事例を示す。第6章ではこれらの研究から見えてきた問題点を記し、第7章においてまとめる。第8章には参考文献を記した。

※1：本学における担任業務

・各学部、学年ごとに分けられたクラス学生を担当する。
・週1回の「総合教養演習」の授業を担当し学生の人格形成を育む。
・前期2回、後期2回の個人面談を行う。
・学生の出席状況を管理し問題のある学生には指導を行う。
・保護者に対して前期終了後、後期終了後に報告書を発送する。

## 2. 青少年のインターネット利用環境実態調査（内閣府）

内閣府は平成26年11月8日～12月7日にかけて「平成26年度 青少年のインターネット利用環境実態調査」を行った。「満10歳から満17歳までの青少年（5,000人）」また「上記青少年と同居する保護者（5,000人）」に対して行われている。本章では、これらの調査結果として平成27年2月に表されたデータ[3]から、現在の青少年のインターネット利用状況を確認する。

### 2.1 インターネット利用率

インターネット利用率では小学校53.0%、中学校79.4%、高校95.8%と、青少年の76.0%が、いずれかのインターネット接続機器でインターネットを利用している[3-1]。

インターネットを利用する機器としてはスマートフォン（42.9%）、ノートパソコン（23.0%）、携帯ゲーム機（18.5%）、タブレット（12.6%）、デスクトップパソコン（11.0%）、携帯音楽プレイヤー（9.5%）が上位を占めている[3-2]。ここから青少年のほとんどが何らかの形でインターネットを使い、半数はスマートフォンを利用していることがわかる。

### 2.2 インターネット利用内容[3-3]

次に青少年のインターネットの利用内容は、高校生ではコミュニケーション（89.6%）、動画視聴（78.3%）、音楽視聴（76.4%）が上位。中学生では、動画視聴（68.8%）、ゲーム（68.7%）、音楽視聴（65.2%）が上位。小学生では、ゲーム（73.8%）、動画視聴（53.7%）、情報検索（48.4%）が上位となっており、高校生では断然コミュニケーションツールとしての機能が利用されていることがわかる。また、調査対象となった高校生の利用機器としてスマートフォンが 874 人、携帯電話が 24 人であったことから多くの高校生がスマートフォンを利用していることがわかる。

### 2.3 インターネット利用時間[3-4]

青少年のインターネット利用は、学校の段階が上がるとともに長時間になり、とりわけ青少年のスマートフォンを通じたインターネット利用が長時間化している。

高校生では、63.3% がスマートフォンを通じて 2 時間以上インターネットを利用している。全体の平均時間としても約 155 分と多くの時間をスマートフォンの前で過ごすことがわかる。ひとつの要因として、高校生がスマートフォンを利用した学修を行っていることが上げられている。いずれにせよ、高校生以上の世代では既にスマートフォンが無くてはならない存在になっていることは容易に推測できる。

## 3. 秀明大学における SNS 利用度調査

前章では現在の青少年においてはインターネットの利用率が高く、コミュニケーション手段としてスマートフォンが中心になり、さらに高校生は長時間にわたってスマートフォンを利用している実態がわかった。高校の延長線上にある大学では必然的に、インターネットやスマートフォンの利用率が更に向上し、それにともない SNS の利用率も上がっていると予想される。そこで本章では秀明大学学生に SNS 利用度調査を行った [4]。

秀明大学 SNS 利用度に関する簡易的な調査
調査対象　経営系 3 学部　2 年～ 4 年　（183 人）
調査期間　2015 年 7 月
※ 本調査は秀明学園夏期研修会の研究発表のために行ったものである。

### 3.1 SNS 種別利用度調査

以下の選択肢から普段利用している SNS を選択させた。
（1）LINE　（2）Facebook　（3）Twitter　（4）Others（複数選択可能）

図表 1 からは LINE、Twitter、Facebook の順で利用されていることがわかる。LINE は特定の友人への連絡、Twitter は情報拡散、Facebook はブログと、それぞれ特徴が異なっている。そのため一概に数の差で何かを語ることはできないが、相当数の学生が SNS を利用していることがわかる。特に LINE は 183 人中 170 人と 92.9% もの学生が利用している。

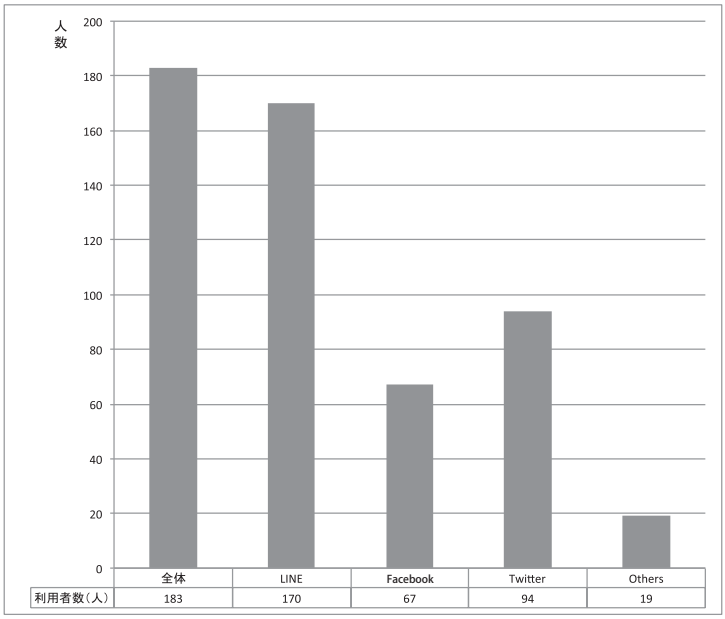
### 3.2 コミュニケーション方法順位調査

コミュニケーションの方法として下記 5 つの選択肢から学生がよく利用するツールに順位付けをしてもらい、上位 3 位までを示したのが図表 2 である。
（1）LINE メッセージ（2）LINE 通話（3）携帯通話（4）携帯メッセージ（5）PC メッセージ

1 位グループでは LINE メッセージ（149 人）、2 位グループでは LINE 通話（102 人）、3 位グループでは携帯通話（85 人）が各順位でトップとなる結果が得られた。ここから秀明大学の学生においては、LINE が通常のコミュニケーションの手段になっていることがわかる。

### 3.3 一人当たりの LINE 利用実態調査

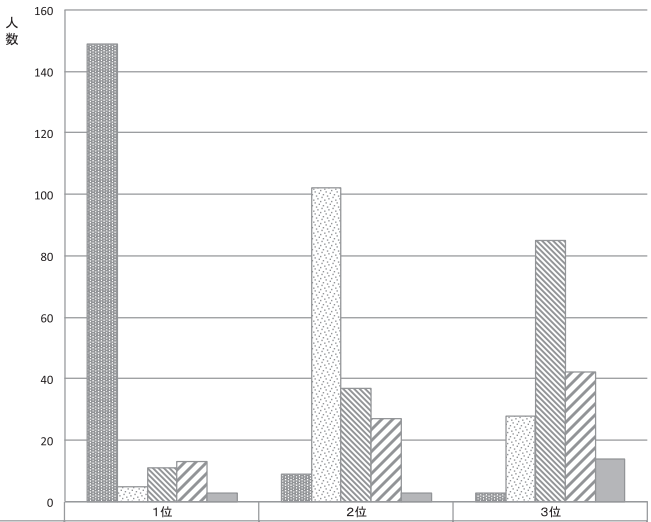
上の SNS 種別利用度調査で 92.9%（170/183 人）の学生が LINE を利用していることがわかった。そこで、次に LINE を利用している学生（170 人）に対して以下の質問を行った。




**図表 1　SNS 種別利用度調査結果**

(1) 友人としてリンクしているアカウントの数　(登録人数)
(2) 過去に既読スルーをしたことがある学生の数　(既読スルー数)
(3) 過去に未読スルーをしたことがある学生の数　(未読スルー数)
(4) 現在ブロックをしているアカウントの数　(ブロック数)
(5) 現在、所属しているグループの数　(所属グループ数)

図表3からは1人あたり平均して94人の友人とリンクを結んでいることがわかる。また、1人あたり平均11のグループに属している。このことから、学生は独自に複数のグループを形成し所属していることがわかる。青少年については言うならば、既読スルー、未読スルー、ブロックが、いじめの原因



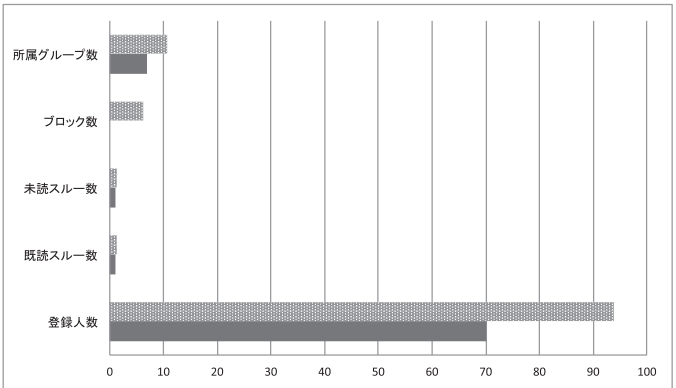

| | 1位 | 2位 | 3位 |
|---|---|---|---|
| LINEメッセージ | 149 | 9 | 3 |
| LINE通話 | 5 | 102 | 28 |
| 携帯通話 | 11 | 37 | 85 |
| 携帯メッセージ | 13 | 27 | 42 |
| PCメッセージ | 3 | 3 | 14 |

**図表２　コミュニケーション方法順位調査結果**

になるという視点がある。しかしながら、大学生を対象とした本調査においては大きな数値としては現れなかった。これらの数値がいじめに対して、どの様に影響するかについては、小学校、中学校、高校といった青少年からのデータを収集するなどして、さらに調査・研究をしていく必要があると考える。

## 4. LINE を活用するメリット

これまでは学生との連絡手段はＥキャンパス、Ｅメール、携帯電話と様々な手法がとられてきたが､限られた時間の中で綿密な連絡を取るためには、伝達時間を短縮させ、伝達率を向上させる必要がある。第２章の調査結果からは、相当数の高校生がスマートフォンをコミュニケーションの手段として長時間使っていることがわかった。また、第３章からは秀明大学の学生のコミュニケーション手段として LINE が多く活用されていることがわかった。以上から現代は LINE のような SNS を利用することが必要不可欠な時代であり、本学でも未来を見越した取り組みが必要になっていると本研究者は考




| | 登録人数 | 既読スルー数 | 未読スルー数 | ブロック数 | 所属グループ数 |
|---|---|---|---|---|---|
| 平均値 | 94 | 1.4 | 1.4 | 6.3 | 11 |
| 中央値 | 70 | 1.0 | 1.0 | 0.0 | 7.0 |

**図表３　LINE 利用状況調査結果**

えている。

また、本学のＥキャンパスシステム（NEARS）は大学独自に開発したものであるが、学生への伝達率が低いことがわかっている。単純にNEARSからの情報を読まない学生がいることも確かであるが、情報を取得した一部の学生がLINEのコミュニティを使い友人たちに伝達していることも容易に予想される。いずれにせよ、学生たちに対する情報伝達の方法としてLINEが有効であることはアンケート結果からも予測できる。

そこで、本研究者は小規模なグループ運営（本研究ではクラス運営）にLINEを活用することが学生への情報伝達率を向上させる有効な方法と考えた。LINEはPush型のコミュニケーションであり、情報が相手に届く時間が早い。また、簡単な操作で情報が発信される。さらに、情報伝達結果が確認できる既読機能は担任にとって大きなメリットになる。

次にLINEには複数のユーザーが同時に参加できるグループ機能（LINE Group）がある。グループ機能は簡単に個人で幾つものグループを作成することができる。この小さなコミュニティに所属するメンバーは情報の共有が可能になる。これは大学の掲示板やメーリングリストと言ったシステムよりも柔軟に情報を伝達することを可能にしている。また、LINE Groupにおいても既読情報がある。個人を特定することはできないが、「○人中□人が既読した」という情報の価値は高い。さらに、ノート機能やアルバム機能がある。LINEにおける文字会話のログは一度消すと再現できない。したがって重要な事項については、ノート機能を使うことでテキストに記録しておく。アルバム機能はグループの共有情報として画像を残すことで、学生一人ひとりのグループへの帰属意識を高めることができる。

## 5. クラスにおける活用事例

第１章※１で紹介しているように、本学の担任業務は重い。クラスの学生とは週１回の総合教養演習という講義で顔を合わせる。講義内容は全人格的な人間形成を目的としており、本研究者のクラスではグループディスカッ

ション、ディベート、創造技法、読書教育、就職活動支援などから構成されている。また、この講義とは別にスポーツデイ（体育祭）や大学祭といった大学行事に積極的に参加させることも重要な業務である。さらに、学生一人ひとりの状況を理解するための教育手段として個別面談がある。これらの多岐にわたる業務は、本学のモットーとしている「日本一面倒見の良い大学」を実現するために必要不可欠な業務である。これらの業務を遂行する中で「学生との連絡」は最重要となる。しかしながら限られた時間の中で、学生との連絡を円滑に行うことは難しい。そこで、本研究ではＥキャンパスや電話を補完する形でLINEを実験的に活用した。その結果として効果があったと思われる事例を以下に紹介したい。

### 5.1 情報伝達への活用

総合教養演習はホームルームとしての意義もあり、大学からの各種の情報を伝達する必要がある。講義に欠席したり、情報を聞き逃したりする学生が必ずいる。本研究者のクラスでは、このような状況をフォローするためにLINE Groupを活用する。また、LINEを使って担任に直接質問が寄せられることも多い。このような質問は他の学生も疑問になっていることが多い。そこで、質問の内容によっては、LINE Group上に質問させるようにしている。これに応えることによって繰り返し答える必要が無くなり教員の負担も減った。具体的には総合教養演習での急な教室変更に対してLINE Groupを使ったことで、多くの学生が遅刻することなく変更した教室に移動できたという例がある。

さらに大学には様々な行事がある。大学祭で模擬店経営を行った。連絡のためにLINE Groupを活用させた。学生たちは自主的にLINE Groupを使いこなし、多くの学生を企画に参加させることに成功した。企画終了後、多くの学生がLINEを使って直接担任宛に感謝の気持ちを伝えてきた。また、クラスの集合写真がLINE Group上にアップされた。ゆとり世代と言われているこの時代、担任としてクラスを纏めていくことは難しい。学生が成人して

いる大学においては殊更に困難である。本事例は学生たちがクラスへの帰属意識を高めたという点において、LINE が有効に活用された事例と言える。

### 5.2 学生面談のスケジュール調整への活用

学生面談は担任にとって大きな負担となる。約 20 人～ 40 人に対して総合教養演習の時間を使い、個人面談に十分な時間を割くことは難しい。そこで必然的に担任は個人面談のためのオフィスアワーを設定するのであるが、このスケジューリングが難しい。学生の空きコマや担任の空き時間を調整するのは面談以上に難儀な作業である。これが上手くいかないと面談から漏れる学生が出てしまう。これまでは連絡が取れない学生に面談のスケジュールを決めるための連絡を E キャンパスで取り、その上でスケジュールの調整をした。連絡が取れないと面談さえできない。そこで、スケジューリングをする際に LINE Group のノート機能を使った。これでも調整ができないときは、個別に LINE で連絡することでスケジュールを完成させた。LINE の活用によりスケジューリングの労力が大きく減少し、面談から漏れる学生が減った。また、自分から面談を希望する学生が昨年後期の 0 人から、本年度 12 月には 5 人に増加している。これも、LINE を有効に活用することで可能になった事例と言える。

### 5.3 欠席時の事前連絡

総合教養演習を欠席する際には、事前に必ず LINE を使い連絡を入れるというルールを決めた。通常、講義の欠席理由まで聞く大学は少ない。しかし、担任制において学生の欠席理由を知ることは肌理の細かい指導につながる。連絡のつかない学生に対して担任から連絡をすることは、学生の大学への帰属意識を高めることにつながる。クラスの学生全体の出席率を見ると 2014 年後期は 84.7%。ルールの設定後における 2015 年前期では 86.8% と微小ながら向上している。本ルールは担任として学生の生活状況を把握するとともに、些細な理由で休む学生の数が減ったと実感している。

### 5.4 問題を抱える学生の早期発見

LINE のプロフィールにあるタイムラインは、フレンドリンクを結んだ相手につぶやきを表示することができる。このつぶやきの中には学生の隠れた思いが現れることが多い。

例えば実際に“Help me”と発した学生がいた。この学生に対して「大丈夫ですか？」と LINE で声をかけ、それが対面指導につながり、最終的には学生の悩みを解決することができた。このように普段顔を合わせる機会の少ない学生であっても、LINE を発端として何かの兆候を掴む切掛けとなることが少なくない。

### 5.5 学生からの情報提供

欠席が重なっている学生の情報が友人から担任に送られてくることがあった。人間関係に悩み登校拒否になりかけているとの情報である。担任は E キャンパスで出席状況を確認することができるが、欠席理由までは知ることができない。この学生に対しては個別面談を行い早期に対応することができた。また、電車の遅延情報が学生から直接送られてくることがある。この情報をもとにインターネットで遅延情報を検索することによって、遅刻してきた学生への柔軟かつ公平な対応が可能になった。

### 5.6 緊急時における担任への連絡

早朝に学生から「お腹が痛いのですが、必修科目があるために出席したい」との連絡が入った。ウイルス性胃腸炎が流行している時期であったために「出席する場合は必ず病院に行って診断書をもらうように」と学生が登校する前に指導することができた。これは大学の危機管理として LINE が重要な役割を担う可能性を示している。また、別の学生からは「登校時に交通事故にあって救急車で病院に運ばれた」と LINE からの連絡があった。これについても早急な対応を取ることによって学生の信頼を得ることができた。

## 6. LINE 活用上の問題点

前章で述べたようにLINEをクラス運営に有効に活用することで様々な効果が得られることがわかった。その一方で、LINEを活用するためには幾つかの問題点も明確になってきた。本章ではLINEをクラス運営に活用するために注意すべき項目を述べたい。

### 6.1 文字を媒体とする問題

LINEでは最小化された文字媒体による通信が行われるが、その伝達速度・効率に特徴がある。容易に情報が送れる反面、文字を間違えたり、送る相手を間違えたりする可能性が高くなった。Eメールについても同様の問題が指摘されているが、友達同士では許される間違いでも、ビジネスや公式の場では取り返しのつかない問題に発展する可能性もある。また、文章力のない学生や、相手の気持ちに立てない学生による文章のコミュニケーションは人間関係に大きな悪影響をもたらす可能性がある。

本研究者はクラスの学生たちにLINEが議論や対話の道具として不適切であることや、文字を使ったコミュニケーションの難しさを普段から指導している。また、LINEは対面でのコミュニケーションへの切掛けとして使っていくことが有効であると教えている。

しかし、その一方でLINEを通じて言葉足らずの質問を投げかけてきたり、難しい議論を持ちかけたりする学生がいることも事実である。また、送るべき相手を間違えたと、明確にわかるようなメッセージが来て困惑することも少なくない。このようなトラブルは、交通事故と同じでゼロにはできないと考える。しかしながら学生の起こす問題の数を限りなく減らしていくためには、問題が起こる都度に丁寧に指導することが重要と考えている。

### 6.2 知的財産権に関する問題

現在の教育現場では著作権や肖像権に関わる情報を、安易に使用したり転載したりと法律的に非常に危険な状況にあると言われている。学生はもとよ

り大学教員もしっかりとした個人情報や知的財産権に関する知識を持つ必要がある[5]。

例えば、友人と一緒に撮った写真を何の認識もせずにアップロードする学生は多い。これについても本来は友人の許可が必須であることを教育する必要がある。アップロードされた情報は、さらに知識のない友人によって拡散されてしまう危険性が常に付きまとう。インターネットの世界では、一度拡散した情報を取り消すことは不可能である。最近のSNSツールは常に進化を続けているため、これらの新しい機能への対応を怠ると個人情報を漏洩させてしまう危険性もある。SNSを教育現場で使うためには、教える側のツールを扱う技術力の維持が重要である。

本研究者はLINEを使う一方で知的財産権に関する指導をしている。その結果として、最近では指導した学生たちの知的財産権に対する意識が変わってきた。例えば、自身のブログに皆で撮影した写真を掲載する際に確認をするといった光景がよく見られる。また、写真の掲載を拒否する人がいるときは、その人の顔が判別できないような修正を施し、本人に確認をとってから掲載する学生も出てきている。

### 6.3 情報活用モラルの問題

情報活用モラルはインターネットやツールの利用方法の問題だけではなく、学生の心の教育の問題でもある。ネット上では通常の道徳心では問題を起こしてしまうこともある。例えばブログ上で友人を助けようと発言したためにブログが炎上。その結果として個人情報が漏洩してしまった等、これまでの常識とは異なる新たな道徳教育の在り方が問われる時代になっている。

本研究者の指導する学生の中にも教員に対して不適切な言葉を使った事例がある。相手の顔が見えないために目上の人に対する礼を欠いてしまったケースである。また、LINE Groupで不適切な発言をする者もいた。グループの皆が読んでいる空間であることを忘れ、一部の友達との会話に夢中になったケースである。進化し続ける情報化の時代において、どのようなことがマ

ナー違反になるのか判断することは難しい。これが未熟な学生であればなおさらである。モラルに反した学生は自身の起こした問題の本質を理解していないことが多い。本研究者は学生が実際にネット上で問題を起こした瞬間の指導を大切にしていくことが重要であると考える。

### 6.4 教育活動上の注意点

知識、技術、心のバランスが取れない学生にとって、インターネットにおけるコミュニケーションは非常に難しいことも現実である。コミュニケーション能力の低い学生はLINEを媒介としたイジメを起こす。これは教育界の常識であり、結果として小中高においてLINEを禁止するところは多い[6]。この点についてLINE株式会社はネット上のコミュニケーショントラブル根絶に向けた対策を発表している[7]。また、2015年9月から東京大学大学院との共同研究でネット利用実態把握を目的とした10万人規模の調査を行うと発表している[8]。

本来SNSは新たな人間関係を作るシステムとしての特性がある。その一方で、小中学校や高校といった青少年の教育現場では、その特性が逆に危険性となる。教育する側は、その点に留意しなくてはならない。本学の系列校においても学内への携帯の持ち込みやLINEの利用が禁止されている(※2)。本研究者は学生と共にLINEを使いながら情報活用能力を向上させる努力をしてきた。また、その一方でSNSに関するニュースや身の回りで起きた問題を取り上げ、その構造や背景を明らかにする指導を行っている。今後SNSを教育に活用するツールとするためには単なる「禁止」から、共に「学ぶ」方向にしていく必要性を強く感じている。

※2：本学系列校について
本学には以下の系列校があり、いずれも学内における携帯電話の使用を禁止している。

・秀明中学校・高等学校（埼玉県川越市）

・秀明英光高等学校（埼玉県上尾市）
・秀明大学学校教師学部附属秀明八千代中学校・高等学校（千葉県八千代市）

## 7. まとめ

本研究では少人数クラスにおいて、汎用型SNSであるLINEに着目し、大学でのクラス教育への活用を試みた。今回の本学のアンケート調査の結果からはLINEを使えない学生が存在していた。LINEのような情報伝達手段を公式なものとするためには、どの学生に対しても平等に使える環境を用意する必要がある。その点で本研究ではクラス全員がLINEを使える環境にあったことが幸運であった。また、クラスの学生たちが協力的であったことも、本研究の結果につながったと考える。

クラス教育におけるLINEの活用はグループの良好な人間関係が大前提であり、実際にグループに加入することを躊躇する学生が居ることも事実である。理由としてはLINEのセキュリティに関する恐怖感や、人間関係から生じる問題であった。これらの問題を解決するためには、第6章における問題を一つ一つ丁寧に解決していくことが必要になる。このような教育を行っていくためにはターゲットが少人数であることが望ましい。本研究者はグループの人数が多いと学生たちが未熟であることから、必ずほころびが生じ組織のコントロールが利かなくなると考えている。

情報の伝達手段は手紙から電話へ、電話から携帯へ、そして携帯からWEBやemailへと時代と共に急速に変化してきた。今後もLINEのように使いやすく情報伝達速度の速いコミュニケーションツールが登場することは想像に難くない。システムを使いこなす人間の技術が未熟であってはならない。個人情報を危険にさらすようでは教育という大切な行為に使うことは難しい。高速情報化の流れの中でSNSを教育に有効活用することは大変に困難である。しかしながら、未来を拓く学生達を育てるためには「規制や禁止」ではなく「共に育む」ことが重要であり、そのためには教員と学生が協力し

ながら、今後も更に多くの知見を積んでいく必要があると考える。

## 8. 参考文献・参考サイト URL

【1】 文部科学省 , 情報活用能力調査の概要（PDF）, 2015 年 3 月 24 日 http://jouhouka.mext.go.jp/school/pdf/gaiyou.pdf

【2】 文部科学省 ,21 世紀を生き抜く児童生徒の情報活用能力育成のために（PDF）, 2015 年 3 月 , http://jouhouka.mext.go.jp/school/pdf/shidoujirei.pdf

【2-1】情報活用能力とは p.2

【3】 内閣府 , 平成 26 年度 青少年のインターネット利用環境実態調査結果（速報）（PDF）,2015 年 2 月 ,http://www8.cao.go.jp/youth/youth-harm/chousa/h26/net-jittai/pdf/kekka_sokuhou1.pdf

【3-1】各機器における青少年のインターネット利用状況 p.3

【3-2】ポイント① 青少年のインターネットの利用状況 -1（インターネット利用率）p.3

【3-3】ポイント② 青少年のインターネットの利用状況 -2（利用内容）1/2 p.4

【3-4】ポイント③ 青少年のインターネットの利用状況 –3（利用時間）1/2 p.6

【4】 田島博之 , 少人数クラスの運営に汎用型ソーシャルネットワークを活用した教育事例の研究 , 第 14 回情報科学技術フォーラム講演論文集（第 3 分冊）pp.533-534, 2015 年 9 月 , 第 14 回情報科学技術フォーラム ( 情報処理学会・電気情報通信学会 ), 愛媛大学 ,2015 年 9 月

【5】 平成 18 年度特許庁研究事業「大学における知的財産教育研究事業 研究成果報告書」山口大学（研究代表者 木村友久）, 2007 年 3 月 , http://www.kim-lab.info/exterorg/hou005b.pdf

【6】 文部科学省 ,「ネット上のいじめ」に関する対応マニュアル・事例集（学校・教員向け）【概要】, 2008 年 11 月 , http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/20/11/08111701/001.pdf

【7】 LINE 株式会社 ,「LINE ワークショップ コミュニケーションを自ら考える」, LINE 安心安全ガイド , 2015 年 6 月 , http://line.me/safety/ja/workshop.html

【8】 LINE 株式会社 ,「LINE、青少年のネット利用実態把握を目的とした 10 万人規模の全国調査を実施」, 2015 年 7 月 , http://linecorp.com/ja/pr/news/ja/2015/1039

（たじま　ひろゆき・准教授）